

対 談

高梨純次×寿福滋 滋賀の仏像を語る

写真集『近江の祈りと美』刊行にあたって

新撰 淡海木間撰 46

琵琶湖文化館所蔵

両界曼荼羅

INFORMATION STATION 催し案内 2010年秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

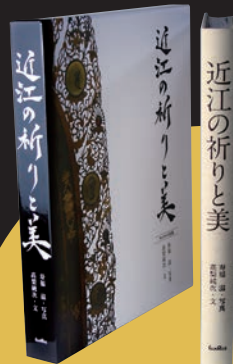
文化財写真のエキスパート・寿福滋さんが撮影した滋賀県内の仏像・神像の写真に、滋賀県立近代美術館の高梨純次さんが解説を付した写真集が完成しました。時代別・テーマ別にすべてカラー写真で掲載された、貴重な秘仏を含む200余体の彫像は、近江の仏教文化の奥深さを物語ります。お二人に撮影の舞台裏などをうかがいました。

高梨純次×寿福滋



滋賀の仏像を語る

写真集『近江の祈りと美』刊行にあたって



写真集 近江の祈りと美

写真／寿福滋 文／高梨純次
A B判 (257×210mm) 上製本
ケース入り 総344頁
定価9450円

書店にて発売中

寿福滋（じゅふく・しげる）
1953年神戸市生まれ。関西を中心に美術・文化財、風景写真を専門に撮影。滋賀県内の自治体史に関わる撮影多数。

高梨純次（たかなし・じゅんじ）
1953年京都市生まれ。同志社大学大学院文学研究科博士前期課程修了。専門は日本美術史。現在、滋賀県立近代美術館学芸課長。

対談

▶『近江の祈りと美』58～59ページ
木造重茶利明王（栗東市・金勝寺蔵 重文）

滋賀県の仏像に関わる道へ

▽プロフィールを見ると、お二人とも1953(昭和28)年のお生まれです。何月生まれですか。

高梨 僕は4月です。

寿福 僕は7月、ほぼ一緒ですね。

▽高梨さんは京都、寿福さんは神戸のお生まれですが、滋賀県の仏像と関わりを持たれた、その経緯をまずお聞かせいただけませんか。3カ月早い高梨さんから。

高梨 高校生のときに京都の国立博物館で「日本国宝展」という展覧会があつて、それらの仏像をどういう人がつくったのかということに興味をもつようになりました。もともと歴史好きだったので、大学は文学部へ入ったんですが、僕は机の前に座って考えるよりも、外に出て体を動かすことの方が好きだったようで、ちょうど当時、同志社大学で講師をやっておられた宇野茂樹^{※1}先生が、滋賀県の寺社仏閣を訪れて調査なさっていることを知り、参加したんです。そこで現場監督をしていたのが、いま栗東歴史民俗博物館館長の佐々木進さんでした。佐々木さんの後ろをひよこひよこ荷物持ちをしてついて行く、思い返すと丁稚奉公みたいな感じで始まったのが滋賀の仏像調査でした。

それが大学から大学院に行くころの話です。当時、井上靖さんの小説なども出て、向源寺(長浜市)の十一面観音像などはメジャーになりつつありましたが、一方で、延暦寺にどういふ仏像があるのかというところ、ほとんどの人は知らないという状態でした。若者からしてみると、何か無限の地平が広がっているような気がして魅力的だったのです。運よく、大学院で留年しているときに、「琵琶湖文化館に空きがあるんだだけ

来ないか」と声をかけてもらい、アルバイトから始めて、昭和54年に滋賀県立琵琶湖文化館に学芸員として入ったからです。

▽高梨さん執筆の解説部分を読んで、私は考古学みたいだという印象を受けました。

高梨 はい、そうかもしれませんね。

寿福 手法がね。

▽美術史では画家の生涯など作品自体以外で語る部分がありますが、モノしかない状態の中で、それぞれの類似などを頼りに筋道を探るといふか。

高梨 例えば今度、県立近代美術館で展覧会(10ページ参照)をする白洲正子さんのように、随筆で「美しい」といった印象を述べる方法もあるわけですが、僕らは、残されたモノを頼りに歴史の中で何が証明していけるかを目指してやってきました。手がかりは仏像だけではなく、お経や図像などの規則書なども参照しながらですが。

近江の村々は中世以降だと非常に多くの文書を保存していたことで知られています。さすがに古代の文書というのは、ほとんどないですね。そういう中で、滋賀県の仏教の歴史、お寺の歴史を構築していくためには、滋賀県に伝わっている仏像というのは非常に有効な素材であると思います。動くことのない考古学の遺構とは違い、仏像はあちらの寺からこちらの寺へと移動することもあるので、その辺の論証が難しい点ではありますけれど。

だから、おっしゃるように、美術史と言ふよりは、しゃれみたいですけど、技術史。こういうふうなものををつくるのかとか、どういうふうなそれを置いて、その周りでどうするかとか、そういうことの方に興味があるのかもしれないですね。

※1 宇野茂樹 1921年滋賀県生まれ。國學院大学卒業。滋賀県重要美術品等調査事務取扱嘱託。滋賀県立産業文化館文化係長。滋賀県立琵琶湖文化館学芸員などを務め、戦後滋賀県の文化財研究を牽引した。栗東歴史民俗博物館名誉館長、小槻大社宮司。著書に「近江路の彫像」(雄山閣出版)、「日本の仏像と仏師たち」(雄山閣出版)など。

ただし、中には現代でも通用するような造形性のものがありますし、まさにトップランナーを走っている単独でもすばらしい造形のもので滋賀県の場合もあります。一つずつでは語れることも限られてしまう。▽今回の写真集のように大量に集まった時、とても有効な方法だというのがわかります。

高梨 そうですね。いままで、滋賀県の場合、こういう本がなかったから。この本を見た方が、僕なんかとは違う、新しい視点で比較検討をしたらえれば、非常にありがたい。その場合、寿福さんの写真は、ちゃんとディテールを出してくれている。研究にも使える写真ですし。

▽「模刻」と呼ぶそうですが、基になる仏像を模したものが、別の複数のお寺でも本尊とされていたり。

高梨 失礼な言い方ですが、1体ではあまりパツとしないなという仏像でも、他との比較でみれば意味はあるんです。比較検討することで新たな視点で見ることができたり、いろいろな可能性が滋賀県の仏像にはあります。

▽続いて、寿福さんは滋賀の仏像との関わりはどの辺からということになりますか。

寿福 私は、そもそも埋蔵文化財の撮影が専門で、博物館や美術館へ出入りするうちに、仏像や絵画など美術品の文化財も撮影するようになったんです。生まれは神戸ですが、物心がついたときには大津市の坂本にいて、そこは朝鮮半島から来た渡来系の

『近江の祈りと美』掲載仏像の収蔵社寺・博物館地図

- 1 阿弥陀寺(長浜市加田町)
- 2 阿弥陀寺(長浜市西浅井町)
- 3 安楽寺
- 4 石馬寺
- 5 石部神社
- 6 石山寺
- 7 井上区吉祥寺
- 8 永源寺
- 9 永昌寺
- 10 恵日院
- 11 圓福院
- 12 延暦寺
- 13 大嶋神社・奥津嶋神社
- 14 大平観音堂
- 15 小田神社
- 16 小槻大社
- 17 園城寺
- 18 春日神社
- 19 観音寺(草津市)
- 20 観音寺(米原市)
- 21 九品寺
- 22 鷄足寺
- 23 高宮寺
- 24 向源寺
- 25 興福寺
- 26 光明院
- 27 胡宮神社
- 28 金剛寺
- 29 金剛定寺
- 30 金剛輪寺
- 31 金勝寺
- 32 金胎寺
- 33 西教寺
- 34 西勝寺
- 35 西明寺(日野町)
- 36 西明寺(甲良町)
- 37 志那神社
- 38 石道寺
- 39 舎那院
- 40 充滿寺
- 41 浄光寺
- 42 浄蔵院
- 43 莊嚴寺
- 44 聖衆來迎寺
- 45 常照庵
- 46 常信寺
- 47 浄信寺
- 48 常善寺
- 49 正伝寺
- 50 乗念寺
- 51 正福寺(甲賀市)
- 52 正福寺(湖南市)
- 53 浄福寺
- 54 正法寺
- 55 正明寺
- 56 常楽寺
- 57 白鬚神社

- 58 神照寺
- 59 真如寺
- 60 盛安寺
- 61 西岸寺
- 62 誓光寺
- 63 千手寺
- 64 善勝寺
- 65 善水寺
- 66 善明寺
- 67 總持寺
- 68 惣持寺
- 69 宗泉寺
- 70 大岡寺
- 71 大光寺
- 72 大日寺
- 73 大宝神社
- 74 高野神社
- 75 竹田神社
- 76 多田幸寺
- 77 橘堂
- 78 建部大社
- 79 長命寺
- 80 天寧寺
- 81 天満神社
- 82 洞照寺
- 83 東南寺
- 84 東方山安養寺
- 85 東方寺
- 86 徳園寺
- 87 西阿彌観音堂
- 88 若王寺
- 89 白山神社
- 90 瑠璃寺
- 91 日牟禮八幡宮
- 92 百濟寺
- 93 日吉神社
- 94 福寿寺
- 95 仏性寺
- 96 仏心寺
- 97 法雲寺
- 98 報恩寺
- 99 宝光寺
- 100 保福寺
- 101 梵釈寺
- 102 満月寺
- 103 御上神社
- 104 妙感寺
- 105 明王院
- 106 妙音寺
- 107 明寿院
- 108 山門区
- 109 来現寺
- 110 来迎寺
- 111 櫛野寺
- 112 蓮乗寺
- 113 蓮長寺

- A 狛坂磨崖仏
- B 逆さ観音
- C 小屋谷観音
- D 弥勒仏坐像
- E 阿弥陀如来坐像(志賀の大仏)
- F 妙光寺地藏磨崖仏
- G 庵少菩提寺
- H 阿弥陀三尊磨崖仏(富川磨崖仏)
- I 鶴川四十八鉢仏

- 1 滋賀県立琵琶湖文化館
- 2 大津市歴史博物館
- 3 栗東歴史民俗博物館
- 4 甲賀市甲賀歴史民俗資料館
- 5 野洲市歴史民俗博物館
- 6 高月観音の里歴史民俗資料館
- 7 延暦寺国宝殿



人たちのお墓とされる古墳群がたくさんある地域でした。やがて、江若鉄道^{※2}が国鉄の湖西線になり、あちこちに県道ができたりと開発が進み、それに並行して古墳などの発掘がどんどん行われました。私が中学生の頃です。いわゆる「考古ボーイ」というやつになって、それから病みつきですね。もう一つ、藤森栄一^{※3}さんの『銅鐸』という本の一部が、たまたま中学か高校の教科書に収録されていて、その文章が好きになったというのもきっかけです。当時、滋賀県は銅鐸が一番たくさん出土した地でしたし。とりあえず、高校生の夏は湖西線の発掘現場へバイトで行っていました。

▽当時は、高校生でもそういうバイトで働けたんですか。

高梨 昔は中学生でもやっていたものね。

寿福 実は、中学から行っていました（笑）。ちょうどあのころは六十年安保と七十年安保があつて、学校に行くのが嫌になった学生なんかが発掘現場にはいっぱい集まってきたんです。ただで飯が食えて、宿舍もあつたから。人間の根源的な性なのか、地面の土をさわりだすと面白いんですよ。いま、その頃の人たちがトップとなり考古学界を引っ張っています。そういう時代に私は中高生だったんです。

▽写真の撮影技術はどこで学んだのですか。寿福 その湖西線の発掘現場に森昭^{※4}さんという考古学専門のカメラマン^{※5}がいっぱいしゃつたんです。土門拳^{※6}みたいな風貌の独特の人ですね。若くして亡くなられたんです。

指定文化財台帳写真撮影事業の成果

▽お二人のおつき合いは、いつぐらいから始まったんですか。

高梨 僕が県立近代美術館に来てからでしょうね。あの当時は、展覧会の経費に今

が、私は森さんのかつこよさにひかれて写真の世界に入ったんです。発掘用に立てられた櫓^{やぐら}の上で絶対に動かない。きれいになるまでどんなことがあつても、シャッターを切らない人でした。森さんが、その後は横浜市港北区の発掘へ行つたんです。それに、私もついて行って…。

▽弟子入りですね。

寿福 といっても、自分の食う分は自分で稼がなくちゃいけないから、横浜市教育委員会に囑託^{しゆくたつ}が入って、遺跡を撮影しました。その辺が写真仕事の初めです。昼間は自分の仕事、夜は大将の食事などの世話。大将は濃いコーヒーが好きですね。

いまから思うのですが、仏像とのかかわりといえば、もう一つあります。僕は坂本の盛安寺^{せいあんじ}が経営している保育園に通つていました。何十年ぶりで訪れたのですが、あそこ^{そこ}に寺の鐘があつてというようにわりと覚えていました。だから、今回の写真集にも掲載した御本尊^{ごほんそん}の木造十一面観音^{じゅうめんくわんおん}立像^{りつざう}を、園児の頃に見ているんじゃないかと思うんです。年に1回ぐらい御開帳^{ごかいだう}か、何かのときに園児に見せてくれたんじゃないか。そんなことも思つて、妙にこの御本尊が好きなんです。これは高梨さんと二人だけで、改めて撮影に行きましたね。

高梨 そうだね。

寿福 本来は大津宮と関わりの深い崇福寺^{すうふくじ}にあつたというのも、考古学好きには特別な思い入れができるし、幼少期の刷り込みなのか、不思議な縁がある仏像です。

より余裕があつたから、県外にある作品を撮影に出かけたんです。「近江八景^{おうかはっけい}をテーマにした展覧会で、川合玉堂^{かわいぎょどう}さんの作品を撮影しに玉堂美術館（東京都青梅市）へ

※2 江若鉄道 浜大津―近江今津間53・2 kmを走っていた私鉄。国鉄の湖西線着工を契機に昭和44年（1969）に廃止された。湖西線は昭和42年に着工、山科―近江塩津間74・1 kmを結び、昭和49年に開業した。また、昭和45年に西大津バイパスの工事も始まっている。

※3 藤森栄一 1911年長野県生まれ。長野県に諏訪考古学研究所を設立。井戸尻遺跡群などを発掘し、在野の立場から縄文中期農耕論などを提唱した。『銅鐸』（学生社）で毎日出版文化賞を受賞。1973年没。

※4 森昭 1942年満州生まれ。高校生の頃に大阪府船橋遺跡の発掘に参加。東京写真短期大学卒業後、主として考古学写真家として活躍。1999年没。『歴史公論』連載「古代の顔」の写真を主体に構成された『人物はにわの世界』（文／稻村繁、同成社、2002年）がある。

行つたり、あの頃は二人で、よくいろいろなところに行きましたね。

寿福 よく行つたね。

高梨 仏像を撮影する仕事に関しては、県教育委員会文化財保護課の宮本忠雄さんが…。

▽昨年まで琵琶湖文化館の館長だった方ですね。

高梨 もう20年以上前になるのか、平成元年度から宮本さんが、仏像の基礎的なデータを集める取り組みを始めたのです。「指定文化財台帳写真撮影事業」といつて、盗難も多いので管理面での必要性も当然ありますが、今後の研究のためにまずどういふものがあるかということを記録して残さなければいけないという考えからです。

作業としては、お寺の仏像を燻^{くん}蒸^{じょう}して虫やカビを殺すために下へ降りていただく。それと合わせて、寿福さんが写真を撮影する、僕も含めた何人かで像高などを計測して記録していく、それをずっと続けていたんです。まさにその継続の成果が今回の写真集だと言つた方がいいかもしれない。

寿福 燻蒸という機会で、秘仏が出せたわけです。単なる調査というだけでは、外に絶対出してもらえなかったような仏像も撮影させてもらえました。

▽今度の本へ掲載されたものの中では、金剛輪寺(愛荘町)のご本尊(秘仏)である聖観音立像など、驚かされました。写真集をつくるからといって撮影させてもらえるものではないでしょうね。

高梨 その仏像調査で、非常に大切にされている仏像や巨大な仏像を動かす中で、僕たち学芸員が育ったんですね。県内にいろいろな館ができ、そこで働き始めた若い学芸員がこの調査を通じて成長したと思っています。そういう意味でも、非常に画期的な事業でした。実際、文化庁などから非常に評価してもらいましたし。

寿福 レプリカを使って学習・実習をするのではなく、国宝や重要文化財の本物を現場で身近に接することができるといのは、ものすごい体験だと思う。

高梨 1カ所に3日ほどかかるんです。最初は善水寺(湖南市岩根)だったかな、大雪の日だったのを覚えています。降ろして、まず最初に調査して、その後、燻蒸して、2日ほどそのままガスを入れて、後、戻しに行く。善水寺さんだと、本堂の中だけで重要文化財が15体ぐらいあるから。

寿福 本堂自体が国宝だからね。

高梨 別の所ですが、仏像を梱包して担架に積み、山道を下ってトラックまで運ぶ間、道の脇におばあさんが並んで手を合わせて、もちろん僕を拝んでいるわけじゃないけど、真剣に見送ってください。日通の人たちも「いまだきこんなところがあるんですね」と驚いていたこともありました。

▽作業中に大発見といったことはありませんたか。

高梨 仏像の胎内から銘文が出てくるというたこともたまにはありますが、もっと初歩的な話で、「何の木でつくってあるか」ということも、触ったり、虫眼鏡で見たりして初めてわかるんですよ。そういう意味から言えば、地味かもしれないけど、日々発見でした。

お寺のご住職や寺守の人も疑問に思っていたことを質問してくださるから、わかる範囲でお答えすると、「へえ」と感心してもらえたり。村の宝」ということを再認識していただける機会にもなりましたね。

寿福 もうそれから年賀状をずっとやりと

仏像に即、入っていきける光の当て方

▽仏像の撮影は、埋蔵文化財の撮影と何か技術的な違いなどがあるのですか。

寿福 仏像も考古も一緒かもしれない。というか、すべて光をどう当てるかなんです。例えば埴輪なんかは素朴な造形で難しいですが、表情がどこかにある。昔は前方後円墳の上に立っていたわけですね。朝日か夕日か、正午ごろか、光の加減で表情が変わるはずですよ。

だから考古も、仏像も光線具合だから、ものすごく自然の中に身を置いて撮影したら発見があるんじゃないかなと、このごろ思います。最近、石仏でそれに挑戦しています。

▽丸一日眺めている必要がありますね。

寿福 そう。本日に丸一日なんです。朝日が当たって、昼日が当たって、夕日が当たって、夜が来て、ろうそくを立てて、下から光が当たったらどんな顔になるかとか、粕坂磨屋仏(栗東市)でやっているんです。怖いんですよ、真つ暗なところで気色悪くて。でも昔の人は絶対にそういう姿を拝んでいた。

りしている人もいっぱいいますよ。

それから忘れていけないのは市や町の博物館・資料館の活動です。ある程度文化財をまとまって有している自治体の館は、お寺さんとも非常に密接な関係を築いておられます。例えば、金勝寺(栗東市)の軍荼利明王立像など、4m近い巨大な像を移動させたんですが、栗東歴史民俗博物館の存在がなければ撮れなかったと思います。**高梨** そうなんですよ。本当に地域の博物館として、立派な活動をなさっていると思います。館長が自分の先輩だから言うわけではなくね。

▽見ているはずですよ。

寿福 ただし、今回の写真集に収録された写真の撮影は、上から光を当てている一般的な博物館の展示と同じようにしています。ちゃんと計測してデータを出していくものなので、光は、左右どちらかの斜め45度上から当てて、立体感が自然に出るようにしています。ただ、最後の1枚は気持ちで撮らせてもらったりするわけです。

▽基本、あまり自分を出さないように。

寿福 自分というのは、たぶん「光」だと思っんですけど、光をここから当てたなというのがわからないように撮っています。光のことを気にせずに、仏像に即、入っていきけるような当て方です。

アングルの高い、低いによっても印象が変わるというのは一般の人にもわかりやすいと思うんですが、僕はレンズの画角によって時代観が変わってくると思っているんです。極端に言えば、同じ仏像を撮っても画角で時代の印象が一世紀ぐらいは変わると。つまり、広角レンズで撮った仏像と、望遠レンズで撮った仏像の写真を並べた場

合、絶対に望遠レンズで撮った方が重量感が出て、歴史を感じさせます。逆に広角で撮ると江戸時代ぐらいの洗練された感じになります。ですから、なるべくひいて望遠で撮っています。仏像から離れていれば、もしカメラが倒れても大丈夫という、安全のためでもあるんですが、できるだけ「長い玉」(望遠レンズ)で撮影しています。

▽これは撮影が難しかったというものは、どれですか。

寿福 全部難しいですが、技術的には表面に金箔をのせたものが難しい。金の反射は激しいですから。けれど、やさしいか難しいかといったら、全部難しい。

高梨 昔に撮ったものを、その後また撮り直しに行くね。別の仕事に便乗するかっこうで。論文に以前の写真を使わせてという、「いや、今度撮ったさかいに、これを使って」と差し替えさせられることがよくある。▽毎回満足していないということです。

▽ところで、近年、仏像ブームといわれる状態が続いていますが、直接的に実感なさることもありますか。

高梨 東大寺の三月堂にある執金剛神立像(国宝)が毎年12月16日に開帳するんですが、僕が学生の頃は、とにかく寒さを我慢しながら、ほとんど人もいないなか丸一日見てるという感じでした。それが10年ほど前、久しぶりに行ってみると、いろいろな大学の先生方が、学生や大学院生を連れて来ていて人だかりでした。だから、昔に比べると興味を持つ学生は増えたんだという印象ですが、逆にこの世界でみんなが飯が食えるかというと、そうでもない。

▽仏像などの文化財調査がずっと継続されればいいですが。

寿福 それと、仏像って、そもそも変わるんじゃないかなと思う。

高梨 うん、変わるよね。

寿福 生きているわけじゃないんだけど。風景と同じで、同じ季節に同じお寺に行っても変わっちゃう。だから、結局は一番最初に撮ったやつが一番いいんです。本当に素直に撮っているからね。2回目、3回目に行くと、1回目よりもシャープには撮れるけれど、自分のその時の気分や天気、同行者もそれぞれ目的とするものが違うし。**高梨** 一緒に来た学芸員、研究の対象も違うし、厄介なことばかりしよるしね、タバコばかり吸いに行つて。

寿福 昨日も阪神負けよったし(笑)。

高梨 すんません。私のことです(笑)。

寿福 でも本当に心の何かがいっぱい出てくるんですよ。だから、なかなか同じものは撮れないですね。同じように撮ろうと思つたら余計に撮れなくなつてしまう。

まだ無尽蔵の滋賀の仏像

高梨 そうですね。実際、滋賀県の仏像の調査は、ある意味、まだ無尽蔵です。我々が調査できたものは、ほとんど鎌倉時代ぐらいまでですから。

今回の写真集でも室町時代の像を少し入れさせていただいたんですが、室町から江戸時代にかけての像でも調査をするべきものは大量にあるんです。失礼な言い方ですが、例えば関東地方のある市の仏像を調査するといふのであれば、幕末の仏像まで含めた悉皆調査ができて、全部報告書に記載できます。ところが、滋賀県では数が多すぎてそんなことは不可能なんです。

江戸時代は非常に世俗を謳歌した時代だという言い方がされますが、人々の信仰心が消えたわけではなくて、いま滋賀県で一

番たくさん残っている仏像はいつの時代のものかというところ、江戸時代のもので、▽やはり、数の上ではそうなんです。

高梨 在家のお宅からお寺の本堂に移されたものなども結構あります。実のところ、江戸時代にまで下ると大量生産の極みみたいなになるので、美術史の点からはあまり見るべきものではありません。けれど、近世の仏教史という観点からみれば、やはり無視するべきではないはずなんです。例えば、関西大学の長谷洋一教授などは、それまで未開拓だった江戸時代の仏像を研究なさつて優れた成果を出しておられます。

時代を越えた影響関係を考えてみると、江戸時代の仏像を研究することは、江戸時代だけにとどまらないんです。ひょっとしたら、われわれが知らない奈良時代の仏像の形が反映されている可能性もある。そう考えれば、江戸は無理にしても、少なくとも室町時代が桃山時代ぐらいまではカバーする必要があります。

寿福 大きなお寺に行くと、江戸時代の仏像が後ろの方にいっぱいあつても、みんな注目しませんね。寄進した人の名前までわかるものもあるのに。

高梨 江戸時代の像だと、銘文が残されているものも多いんです。誰が何を祈願してつくられたかといった、その像についての情報は圧倒的に多いんですよ。

それに平安時代の仏像といつても、「後補」といって、後から修理された部分があります。中には、極彩色に塗ってあったりともない表現もあるので、現在、修理するとそれを落としてしまいます。ところが、江戸時代の研究をしている人間にとつては、そのときの極彩色が意味があるんですよ。でも、我々は、それを除外して考えてしまふ。

▽時代を経る中で姿が変わったというものだと、今回の写真集に掲載されたものでは、鶏足寺（長浜市）の菩薩形立像は…。

寿福 普通には、「魚籃観音」といった方が通りがいいよね。

高梨 ふだん世代閣という収蔵庫で拝観する時は、魚の入ったビク（魚籃）を左手にさげているんです。これは後の時代になっ

除いた写真の方を掲載しています。別の千手観音さんでも、普段は持つっている錫杖が新しいものなので取り除いて撮影したとあります。なるべく、造られた当初の姿を想定できるようにというのが、今の我々のスタンスなので。でも、やっぱりご住職の中には、「ちゃんとして撮ってください」と言う人もいますので、普段の状態の写真も1枚撮らせていただいたり。

仏像は場所の記憶と一体

▽読者が仏像の写真を見る際に、こう見ると面白いよというアドバイスはありますか。高梨 仏さまというのは、当時の人が考えていた人体表現の理想型なんです。それは美男美女の基準というのとも違って、ずんぐりむつくりに見える像もお経に「如来は九い」といったことが書いてあるからで。そういう意味で、古代の日本人が、いたい何に神々しさを感じたか、理想的なものを見たかを考えてはどうでしょう。ギリシャ彫刻からの系譜にある西洋美術のリアリティとは違ったものとして。

▽様式化が進んだせいで、とてもモダンな印象になっている仏像もありますね。

高梨 うん、あります。逆に。

寿福 来迎寺（野洲市）の聖観音立像の顔など、デザインとして優れていますよね。▽オリエンタルな感じもあって。

高梨 同じ時代でも、快慶の像、運慶の像は違うんですね。鎌倉彫刻というと、イメージとしては運慶的な、ものすごく豪快な感じで言うんだけど、一方で、快慶みたいに非常に丹精で整ったものもある。後者は、平安時代後半の貴族文化の到着点だったのかもしれない。

寿福 改めて質問するけど、高梨さんが一番ほれている仏像はどれなんですか。

高梨 友人で、いま同志社大学教授（近世芸能史）の西岡直樹さんの実家が旧びわ町（長浜市）にあつて、学生時代、その家に泊めてもらいながら、湖北のお寺を何日もかけて回ったことがあったんです。向源寺の十一面観音、鶏足寺や充滿寺の仏像、西野薬師堂（充滿寺）、石道の…。京都のお寺みたいに拝観料を払ってではなく、村のおばあさんに聞くと、「今日は誰が当番かいな」といってお堂の鍵を持っている人を探してくる。西野の薬師堂を訪れたとき、大学の同級生が運転していた古い車がエンストして動かなくなってしまう、薬師堂の管理をしている人がバイク屋さんと呼んできてくれて、その人が、配線をきゅきゅっと触つてすぐに直した。そういう変な思い出がたくさんあるので、やっぱり湖北の仏像が、僕にとっては原点なのと違いますかね。▽他との比較でこれこれが技術的に優れているという話になるのかと思ったのですが、場所にもつわる思い出ですか（笑）。

寿福 僕の場合も、何が楽しいかというと、やっぱり、その土地の空気に触れるのが楽しい。その土地のおばちゃんが話す言葉で聞いて、国宝級のものを守ってきた村の人の姿を見て、そういう全体に触れていると、高梨 正直いうと、僕は、「遅きに失しているのかな」という気がします。でも、なかなかできないよね、今の世の中。そういう意味では、今は危機なんじゃないですか。ずっと仏像を造ってきて、守ってきて、当然、戦争などで失われたものも多いんだけど。今はそういう危機はないにもかかわらず、若い芸員が本物に緊張感を持つて触れる機会がないとすれば、問題です。

寿福 とにかくフィルムが変色するぎりぎり前でもよかった。もう20年ぐらい経っているものもあるから危なかった。

高梨 この仕事を一緒にしている者は、皆それをものすごく気にしています。

寿福 デジタル化されて保存の方法も変わってきますが、アナログの味わいが表現できた今回の出版にとっても感謝しています。（2010年9月16日、滋賀県立近代美術館にて）

※5 丈六 1丈6尺（約4.85m）の仏像。釈迦の身長が1丈6尺あったとされることになむ。坐像の場合は、半分の8尺に作るが、これも丈六という。

撮影自体は、決して楽しいものではない。だって、鑑賞して撮っていることは、実はほとんどなくて、ピントは、露出は、このフィルムとは相性が悪かったなとか、背景紙の色を変えたかったとか、そんなことばかり考えていますからね。特にこの頃は収蔵庫での撮影が多いんですが、できれば本尊さんを本来の場所に置いて撮影してみたいですね。例えば、野洲市にある仏性寺の阿弥陀如来坐像はいわゆる丈六の大きな像なので、もともと置いてあった位置の屋根の背が一部ボコッと高い、像に合わせて作られた特殊な建物だったんです。今度の本に掲載している写真は、別に設けられた収蔵庫の中での撮影なんですけどね。

▽最後に、今回の刊行について何か。

高梨 正直いうと、僕は、「遅きに失しているのかな」という気がします。でも、なかなかできないよね、今の世の中。そういう意味では、今は危機なんじゃないですか。ずっと仏像を造ってきて、守ってきて、当然、戦争などで失われたものも多いんだけど。今はそういう危機はないにもかかわらず、若い芸員が本物に緊張感を持つて触れる機会がないとすれば、問題です。

琵琶湖文化館所蔵 両界曼茶羅

滋賀県立琵琶湖文化館学芸員
井上ひろ美

琵琶湖文化館が所蔵している仏画の一つに鎌倉時代に製作された両界曼茶羅があります。形あるものがいずれ形を失っていくという道理にしたがい、こうした掛軸などの文化財も徐々に傷んでいきます。この曼茶羅は絵絹に描かれていましたが、絵絹は折れ、絵の具も落ち、公開に支障をきたす状況にまで陥っていました。

平成4年（1992）、琵琶湖文化館ではこの曼茶羅

の修理を行うことにしました。大切な文化財

ですので、当時県内に発足

したばかりの文化財修理工房

へ修理をお願いしました。国宝

や重要文化財を修理する工房におられた方が独立開業されたもので、当然文化財修理についても相当の実績がある修理技術者でした。

平成4～6年度の3か年をかけて、曼茶羅は無事に修理されました。この修理にあたり、琵琶湖文化館では一つの試みに挑戦しました。それは掛軸の表具です。

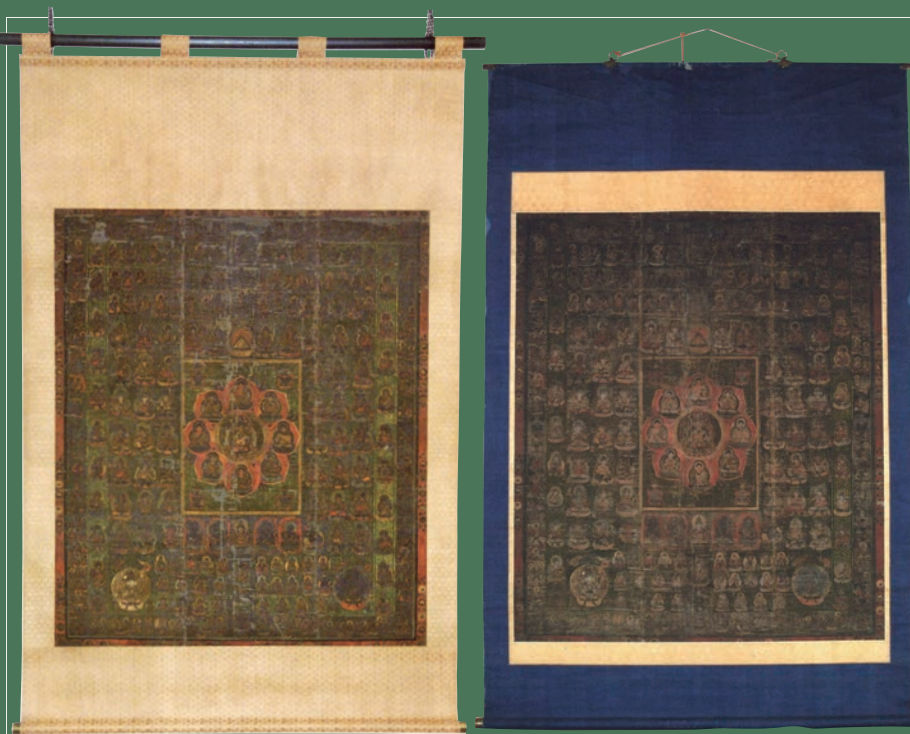
掛軸の表具は色とその取り合わせが様々にあることはご承知の方も多いかと思いますが、実は形も色々あります。この曼茶羅では、大きな掛軸にのみ使用されるという表装のスタイルを採用しました。通常の紐で吊りさげるものではなく、表装裂で輪をつくり、そこに棒を通し、取り付けた金具で吊り下げるといいます。

こうしたスタイルの掛軸は京都の東寺に伝わる両界曼茶羅の表装にみられるものですが、全国的にもとても珍しいもので、数えるほどしかありません。琵琶湖文化館の両界曼茶羅はただ修理するだけでなく、途絶えてしまう可能性がある表装の文化までもを同時に後世に伝えようとした事業でもありました。

文化財修理は、今では大変専門的なものとなっていました。私も学芸員としての活動の中で、残念な結果となってしまった修理をいくつも見てきました。だからこそ、そうなる前に地域の博物館や教育委員会などに気軽に相談していただけたら、と思っています。

▲右：修理前、左：修理後

●井上ひろ美著『淡海文庫 継承される文化財―模写・模造・修理―』（サンラ イズ出版）が近日発行予定。



生誕1000年特別展 白洲正子

神と仏、自然への祈り

10月19日(火)～11月21日(日)

随筆家・白洲正子が執筆した紀行文『近江山河抄』や『十一面観音巡礼』などの中で触れている、神・仏像や絵画の名作約60点を展示し、季節感あふれる映像を交えて、美意識あふれる彼女の世界を紹介します。

「休館日」月曜日 「観覧料」一般950円、高大生650円、小中生450円

講演会「白洲正子 神と仏、自然への祈り」

10月31日(日) 午後3時～

「講師」白洲信哉氏(随筆家)

「会場」滋賀県立近代美術館講堂(聴講無料)

日曜美術鑑賞会

「白洲正子の著作と展覧会の出品作品」

11月14日(日) 午後1時30分～

「講師」高梨純次(滋賀県立近代美術館)

「会場」滋賀県立近代美術館講堂(聴講無料)

文化財講演会

11月20日(土) 午後1時～4時

1 「神仏習合が生み出した造形」

「講師」山下立氏(滋賀県立安土城考古博物館)

2 「山のカミ・湖のカミ」

「講師」大沼芳幸氏(勸励資財文化財保護協会)

「参加費」500円「定員」150名(先着順)

「お問い合わせ先」滋賀県立近代美術館

TEL 077(543)2111

開館20周年記念企画展 大津 国宝への旅

10月9日(土)～11月23日(火・祝)

開館20周年を記念して、県内初公開となる園城寺の黄不動尊や智証大師(円珍)像、聖衆来迎寺の六道絵をはじめとする国宝35点、重要文化財55点、大津ゆかりの名宝約150点を過去最大規模で展示します。

「観覧料」一般1000円、高大生500円、小中生無料

「休館日」月曜日、11月4日

「お問い合わせ先」大津市歴史博物館

TEL 077(521)2100

企画展 史跡大岩山古墳群の全貌

10月2日(土)～11月23日(祝)

野洲市にある国史跡大岩山古墳群は、平成21年度に8基の古墳整備事業が完了し、



大岩山丘陵から平地に所在する古墳の実態が明らかになってきました。史跡整備に伴う調査や周辺の調査成果から、古墳群の実態に迫ります。

「休館日」月・火曜日、11月4日(11月23日は開館)

「入館料」大人200円、学生150円、小中生100円 ※野洲市民は入館無料

記念講演会
11月6日(土) 午後2時～4時30分

「大岩山遺跡群発見学史」

「講師」花田勝広氏(野洲市教育委員会)

「近江の古墳と大岩山古墳群」

「講師」細川修平氏(滋賀県教育委員会)

「定員」120名(当日受付、要入館料)

「お問い合わせ先」野洲市歴史民俗博物館

TEL 077(587)4410

正明寺御本尊御開帳

10月17日(日)～11月23日(祝)

日野町松尾の正明寺で、33年ぶりに秘仏の本尊千手観音立像と脇侍の不動明王、

木造千手観音立像 正明寺蔵(撮影・寿福滋)



毘沙門天(3体とも国の重要文化財)が特別一般公開されます。檜皮葺き屋根で本殿も、桃山建築様式の重文。

「特別拝観料」500円

「お問い合わせ先」正明寺

TEL 0748(52)0227

企画展 語り継がれる近江商人 エピソード

9月14日(火)～11月28日(日)

東近江地域の人びとは、将来実業界に雄飛することを目指す子弟や郷土の青年たちの良き目標として、近江商人たちの成功体験を正しく後世に伝え、実績を顕彰してきました。東近江地域を代表する7人の近江商人の業績がどのように語り継がれ、人びとをどのように感化してきたのかを約90点の資料とともに検証します。

本展で紹介する近江商人

西川甚五郎(近江八幡)、矢野喜兵衛(日野)、松居久次郎(五個荘)、小杉五郎右衛門(五個荘)、高田善右衛門(五個荘)、松居泰次良(湖東)、藤井彦四郎(五個荘)

「休館日」月曜日(祝日を除く)・祝翌日

「入館料」大人200円、小中生100円

「お問い合わせ先」近江商人博物館

TEL 0748(48)7101



歌集 暮らしの中のハーモニー
のぶかあちゃんのうた日記①

前田のぶ 著
A 4判並製本 総146頁 非売品
お問い合わせ先 愛知郡愛荘町岩倉754-2(著者)

長野県での肢体不自由児施設勤務、茗荷村での生活などを経験した後、実子、里子、障害のある人たちとの共同生活を送る著者が制作したCDの楽譜と歌詞を収録。それぞれの曲ができたきっかけを記したメモ付き。(2010. 6.15刊)



奈津子のパンドラの箱

河礼子 著
四六判上製本 総86頁 非売品
お問い合わせ先 大津市横木二丁目9-1
MIRE 音楽倶楽部内(著者)

4歳の頃、波の高い岸辺で「奈津子、一緒に死んでくれるか」とつぶやく母の姿から始まる新田奈津子の記憶。老後に語り始めた人生、親交をもつ著者書き留めた。(2010. 6.20刊)



昭和17年、戦時学生の日誌

筈見時男 著
B 5判並製本 総160頁 定価2520円
書店にて発売中

廠営訓練、麦刈手伝い、実砲射撃…。戦時中の学生はいかに過ごしたのか。昭和17年(1942)、16歳の著者は滋賀県立八幡商業学校5年生として、日常を文章と挿絵で記していた。赤裸々に綴った等身大の記録。(2010. 7. 1刊)



よもやまばなし
草津歩こう会 四方山話100話

—歩いて、歩いて、健康に—
中村啓一 著
B 5判並製本 総212頁 非売品
お問い合わせ先 草津市渋川一丁目9-7(著者)

毎月1回京滋の山や史跡を巡る草津歩こう会。休憩時間を使って、山歩きに関する実用的な知識をまとめたレジュメを配布してきた著者が、それらに新規原稿を加えて一冊に。(2010. 9刊)

びわ湖の森の生きもの研究会主催
ビワマスの産卵観察会

11月7日(日) 午後1時～4時(予定)

ビワマスの生態、ビワマスを育む森についての講演を聞いた後、産卵のため遡上してきたビワマスを観察します。

講師 藤岡康弘氏、青木繁氏(びわ湖の森の生き物研究会)
集合場所 高島市安曇川世代交流センター(午後1時厳守)
観察場所 石田川(または安曇川)
持ち物 長靴、サングラス、雨合羽
(お持ちの方は胴長靴、双眼鏡)

定員 20名(先着順)
参加費 500円(小学生以下は無料)
お申込み方法

お電話もしくはファックスで、参加希望者のお名前とご電話番号を下記へ。
びわ湖の森の生き物研究会事務局
(サンライズ出版内)担当: 岸田

TEL 0749(22)0627 FAX 0749(23)7720

その他 観察場所までは車で移動となるため、乗用車にてご参加ください。河川の増水や親魚の河川遡上状況により、観察会を中止あるいは変更する場合があります。その場合は前日までに電話等でお知らせします。

緊急連絡先 携帯 090-5163-9757(藤岡康弘氏)



矢とりの地蔵 秘めたる観音
—仏心寺のほとけたち—
10月30日(土)～12月19日(日)
『今昔物語集』などにも登場する「矢とりの地蔵」こと、仏心寺の木造地蔵菩薩立像と、本堂隣の観音堂にある「秘めたる観音」こと木造聖観音立像(ともに国の重要文化財)を展示。特に後者の胎内仏、7・7cmの金銅菩薩立像は初公開となります。
「入館料」大人3000円、小中生1500円
「休館日」月・火曜日
ギャラリートーク「仏心寺の聖観音立像」
11月7日(日) 午後1時30分～3時
「講師」高梨純次氏(滋賀県立近代美術館)
「場所」企画展示室
「お問い合わせ先」愛荘町立歴史文化博物館
TEL 0749(37)4500

Q&Aでわかる近江商人

NPO法人三方よし研究所 編
四六判並製本 総256頁 定価1680円

書店にて発売中

近江商人の理念や商法が今、見直されているのはなぜか。素朴な39の疑問に答える形式で、若い企業家を支えるために「出世証文」と呼ばれるシステムを作ったり、環境問題に取り組んだ近江商人の姿を学ぼう。



浅井三姉妹を歩く

長浜市長浜城歴史博物館 編
B5判並製本 総112頁 定価1575円

書店にて発売中

浅井三姉妹が主人公となる2011年大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」の舞台は、近江、若狭、越前、伊勢、尾張、京、大坂、そして江戸。姫たちの足跡とゆかりの城跡をめぐる、城下町散策ガイドブック完成。



琵琶湖のハスと近江妙蓮

中川原正美 著
四六判並製本 総350頁 定価2940円

書店にて発売中

室町時代に中国から伝来し、近江国の大日池（滋賀県守山市）に根づいた近江妙蓮。琵琶湖岸に群生したハスの歴史とともに、吉祥のシンボルとして将軍家や天皇家に愛され続けた近江妙蓮の逸話を紹介。



愛知の山城ベスト50を歩く

愛知中世城郭研究会・中井均 編著
A5判並製本 総294頁 定価1890円

書店にて発売中

信長・秀吉・家康の出生地であり、数々の名将を輩出した愛知県は尾張と三河の二国からなる。信長が美濃攻略の戦略拠点とした小牧山城や、武田軍の猛攻をしのいだ長篠城など50の山城と17の平城を紹介。



中小企業の環境経営

地域と生物多様性
岸田眞代・香坂玲 編著
A5判並製本 総98頁 定価1260円

書店にて発売中

愛知県下の中小企業における活動事例を収録。名古屋商工会議所作成の環境行動計画も付記し、バラエティに富んだ東海地域の循環・環境配慮型地域社会構築のヒントとなる一冊。



人間キャリア創造論

野本茂・李艶 編著
A5判並製本 総220頁 定価1890円

書店にて発売中

日本人は、グローバリゼーション、新興国経済の飛躍的發展などによって、どのように生き方・働き方を変えていかざるをえないのか。「キャリア」をキーワードに、今日の日本人の生きる状況を読み解く。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

お申し込み先

〒522-0004
滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社
Duet 編集部
TEL (0749) 22-0627
FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>



表紙写真

木造虚空蔵菩薩半跏像

金勝寺蔵(栗東市)・重文、平安時代

撮影・寿福滋

めくつてもめくつても重文、重文…。3分の1ぐらいで満腹になり、いったん閉じて明日に回さざるをえない。そんな贅沢な写真集が出来上がりました。今現在の私のお気に入り、本文記事で「驚かされます」と言っていた金剛輪寺のご本尊（秘仏）よりも、その次のページに載っている前立の木造聖観音立像。重厚な像の多い中、よい意味での軽みを感じられるお姿です。

㊦